

4 モデル校実践報告 [気仙沼市立津谷小学校]

(1) 実践概要

特別支援学級(肢体不自由・重複)における合理的配慮と個別の教育支援計画の理解啓発に向けた取組

本校モデル事業対象児童は、両下肢の麻痺のため車椅子で生活をしており、その他に知的障害、てんかん、弱視などの複数の障害を併せ有している。その現状から市の教育支援委員会では特別支援学校での学習が適当と判断したものの、本人および保護者の希望により、本校へ就学することとなった。地域の同級生と学習したり、遊んだりするかけがえのない経験を通して、友達を作ったり、できることを増やしたりしていきたいとの願いがあった。

本校では新たに肢体不自由学級を設けることになり、そこに向けての課題として、これまで肢体不自由学級がなく、十分な知識や経験を持った支援者がいないこと、さらには、車椅子を使用する児童に対応した設備が十分とは言えず、迎えるにあたっては環境整備が必要であった。

そこで、学習環境の整備については主に市教育委員会が対応し、対象児童への支援の在り方については、本校職員で検討し肢体不自由教育に関する教育課程を編成することになった。児童の実態把握のためのアセスメントの方法や自立活動を中心としたカリキュラムの編成、児童の特性を踏まえた合理的配慮の確認など一つ一つを定めていき、さらに、校内におけるインクルーシブ教育システム構築に向けた本モデル事業の実践となった。

実践にあたっては多くの関係機関の方々へ指導をいただき、本事業に携わった関係者との関係構築も本校の実践の成果である。

(2) 平成30年度の実践の概要

重点的な取組内容	(1) 児童の実態把握と保護者との合理的配慮の合意形成 (2) 学習や交流を行うにあたっての基本的な環境整備 (3) 校内での役割分担および外部の支援機関との連携体制の構築
成果	(1) 保護者や関係者との話し合いを経て、基本的な活動を定めることができた。 (2) 活動に必要な教具は特別支援学校から借用したり、少しずつ自作したりしながら整えることができた。交流学級での過ごし方は交流学級担任と調整してルーティン化することができた。 (3) 外部の支援機関とのつながりができ、相談する窓口ができた。
次年度の課題	・ 対象児童の実態・成長に合わせて、よりよい活動内容を模索し、教室をはじめとする学習環境を整備する。手術入院のため半年間転出(後半)していたため、もう一度実態把握をしっかりとる必要がある。 ・ 交流学級や他学年の児童への働き掛けを工夫し、周りの児童が対象児童に自然に関わり、共に学ぶ関係を築く。併せて特別支援学級と交流学級とで共通理解し、よりよい交流活動のカリキュラムの構築を工夫する。 ・ 校外の関係機関とさらに連携を密にし、よりよい支援の在り方を多面的に模索する。複数での指導(特に自立活動)の十分な支援体制を校内で整備する。

(3) 令和元年度の取組の概要

重点的な取組内容	<p>(1)児童の障害の理解を深め、指導方法を工夫する。</p> <p>(2)保護者との共通理解を図り、よりよい自立活動の進め方、学習や休み時間の交流の仕方を模索する。</p> <p>(3)必要な場面で必要な支援ができる校内体制を整える。</p>
成果	<p>(1)モデル事業担当者によるケース会、共に学ぶ教育推進モデル事業の学校訪問、マザーズホームの訪問支援での話し合いなどを通して、対象児童の実態をより詳しく把握し、より効果的（障害特性を踏まえた専門的内容）な授業ができるよう意見交換を行うことができた。</p> <p>(2)保護者のニーズを取り入れた授業づくりを行うとともに、交流学級や学年での交流及び共同学習の仕方について実践を通じて検証をした。（運動会、遠足、幼稚園との交流、学習発表会、持久走大会、町探検など）</p> <p>(3)休み時間などに特別支援学級で自由に交流できる時間を設定し、対象児童と交流学級の友達が自然に遊べるようになった。その結果、対象児童に対して、自主的にかつ好意的に関わる友達が多くなった。</p> <p>(4)T・Tでの指導を定期的に行えるように調整し、担任以外とも落ち着いて関わられるようになってきた。会話の中から言葉も獲得できてきている。</p>
次年度の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者や関係機関との情報交換・連携を密にし、対象児童の実態を正確に捉え、より個に合った自立活動や交流活動を行う。 ・保護者との話し合いを密にし、児童に対する合理的配慮をさらに検討する。 ・地域の幼保・小・中学校へ、本校の取組を発信する。

(4) 令和2年度の取組（まとめ）

指導目標	<p>(1)対象児童の実態の把握を進め、より個に合った自立活動の在り方を模索すると共に、学年が進んで変化した対象児童の環境に円滑に馴染んでいけるように支援する。</p> <p>(2)中学年に進み、新たに触れる教科学習・様々な活動への取組方法に対して、保護者と合理的配慮の内容を確認し、交流の仕方を模索する。</p> <p>(3)地域の関係機関に本校の取組を発信する。</p>
指導目標に対する主な手立て	<p>(1)保護者や関係機関、交流学級担任との話し合いの機会を設け、具体的な問題点を提起して、新しい交流の仕方を模索する。</p> <p>(2)各教科の年間指導計画から交流を見込める活動を抽出し、理科や社会科、総合的な学習の時間での交流の仕方について合理的配慮の内容を確認する。</p> <p>(3)授業公開等の仕方を検討し、参加しやすい研修の在り方を探る。</p>
経過	<p>(1)について</p> <p>新型コロナウイルス感染症予防による臨時休業のため、6月から本格的に児童の登校が始まる。対象児童は3年生になり、交流の仕方について、以下の点において主な変更があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流学級での座席は最前列廊下側。（教室への出入りのしやすさを優先）

- ・教室での係は「日めくり係」。(昨年度は誕生日係)
- ・給食の配膳はストローを割く(1本ずつにする)こと。(昨年度は配付も)
- ・当面の間、密を避けるため、給食は家庭科室と教室で半分ずつに分かれる。
- ・学級の児童数が増え、友達の座席の間を通ることができなくなり、座席については、変更になった。そのため、給食の配膳の仕事はストローを割くことだけになった。その分、仕事を対象児に多く担当させるなど友達が配慮している様子が伺えた。

- ・教室での係は今年から「日めくり係」となり、毎日学級に来てすぐに1枚めくってクラスみんなで日付を確認した。この時に対象児童を手伝ってくれるのが、「お手伝い係」で、日めくりを手にしやすいように、支援してくれた。また、この係は対象児童が朝登校するのに合わせて、昇降口に集まり、靴を履き替えさせたり、車椅子を押してあげたりとお世話を進んでいる。

- ・6月から始まった新学期だが、コロナ禍のため、以前行っていた休み時間の特別支援学級での交流を控えていた。しかし、対象児童にとって友達との関わり



りは他に代えがたい価値のあるものであると考え、保護者の了解を得た上で、マスクの着用、手指の消毒の励行を条件に交流を再開することにした。現在は以前のように訪れる児童が増えてきた。対象児童は友達が訪れることを楽しみにし、友達もまた対象児童との交流に積極的になってきた。

学校でも定期的に歩行練習を取り入れることを保護者との話合いで確認し、8月から通院先の作業療法士や保護者から歩行練習のポイントを教えていただいて、9月半ばから活動に取り入れた。はじめは進め方もぎこちなく、対象児童も学校でPCW(後方支持型歩行器)を使うことに慣れていないためか、うまくいかなかった。時間帯や準備運動を工夫することによって少しずつ慣れて、現在はT・T体制で指導に当たり、廊下を60～70歩ほど歩くことができた。



(2)について

理科・社会科・総合的な学習の時間については、友達との交流を目的に、実験や見学などの体験活動を中心に参加できそうな内容の活動を選んで参加した。

社会科では「まちで働く人たち」のスーパーマーケット見学に参加した。徒歩で参加し、車椅子で移動するため、途中で別ルートをたどりながら見学場所に着いた。3グループに分かれた見学グループの1つに加わり、質問を求められた場面では、友達をまねして挙手する様子が見られた。

総合的な学習の時間では高齢者疑似体験の学習で交流を行った。活動は大きく2つあり、車椅子体験と重りやゴーグルを身に付けて高齢者の不自由さを実感する体験だった。

	<p>車椅子体験には、対象児童は自分の車椅子で参加した。車椅子に乗って同じ目線になった友達と対象児童が積極的に交流することや、協力学級の児童が普段から対象児童の感じている感覚を体験することが目的だった。対象児童は活動のはじめこそ、周囲の様子や状況を把握するのに精一杯な様子だったが、慣れるとみんなと同じコースを自走し始めた。友達と一緒に車椅子を自走し進むことを楽しんでいる様子だった。交流学級の児童は、はじめに講師の方から車椅子の押し方や畳み方などを教えてもらっている際には、時折対象児童の車椅子と見比べながら興味深く聞いていた。小回りの難しさや地面の状況がよくない時のこぐ手の重さを口にする児童も見受けられた。事後の感想では、対象児童の日常の大変さに言及する児童も見られた。</p> <p>(3)について</p> <p>当初地域の学校に発信して、授業を公開することも考えたが、様々な事情でできなかった。</p>
<p>成果とまとめ</p>	<p>(1) コロナ禍の混乱の中でクラスの数が増え、困り感が予想される点について、少しずつ慣れさせていくことができた。昨年度まで別のクラスだった友達も増え、対象児童が同じ学年の仲間として前向きに迎えられていることが実感できた。必要な自立活動として、歩行練習を日常的に行うことができるようになったのは大きな成果と考える。</p> <p>(2) 生活単元学習の1つとして、理科・社会科・総合的な学習の時間に取り組んでいる。内容が難しくなり、目標を同じくした活動は難しいものの、交流がめあてと考えると、交流学級には友達や担任の先生がいて、一緒に活動するものだということが定着し、安心して取り組んでいるのは大きな成長と考える。</p> <p>(3) 今後の課題として、市の教育委員会や地域の教育研究会と連携して今回の活動を共有する方策を探っていきたいと考える。</p>
<p>その他</p>	<p>・対象児童の実態把握について、保護者には大変な負担を掛け、協力をいただく部分が多かったため、今後は今以上に細かな打合せが必須である。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>現在、対象児童と交流学級の児童との関係性が良好で、効果的な交流学習が実践できている。しかし、今後学年が進むにあたり、様々な課題(学習内容等)が予想されるため、交流及び共同学習等の内容を吟味して計画を立てていくことが求められる。そのためには、保護者と話し合いを持ち、合理的配慮の内容を模索していくことが必要である。</p> <p>また、共に学ぶ教育を推進していくためには、本校職員はもとより、より多くの人たちの理解を得ることが大切である。今の対象児童がどんな活動を行い、どのようなことに困って何を求めているのかを共有し、さらに現在の状況でどんなことが不十分なのかを確認していくことが必要だと考える。</p>



(5) 「共に学ぶ教育推進モデル事業」について

ア 合理的配慮と個別の教育支援計画の理解啓発

- ① 定期的なアセスメントと合理的配慮に基づいた個別の教育支援計画・指導計画の作成。
- ② 対象児童のアセスメントには、広島県立福山特別支援学校で出しているチェックシートを保護者と担任がそれぞれ行い、認識が異なっている部分をすりあわせながら合理的配慮の在り方について探った。チェックシートは膨大な量に渡るもので、今後定期的に行うために、より気軽にできるものを探していければと感じた。
- ③ 対象児童および交流学級の児童の変容について
 - 対象児童の様子について

研修会において宮城教育大学の植木田潤先生から、子供の自立・共生には土台となる次の4つの力が必要となるという助言がとても参考になった。

 - ・ 基礎的な体力・健康(身体面の発達)
 - ・ 学び考える力(認知面の発達)
 - ・ 不安・不満に負けない力(情緒面の発達)
 - ・ 意思・意欲を発揮する力(自己性の発達)
 - 交流学級児童について
 - ・ 小学校入学後に対象児童と知り合った交流学級の児童もいたが、保護者に対象児童が有する障害について情報共有する機会を設け、対象児童を正しく受け入れることができた。
 - ・ 対象児童との関わり方のルールを確認・共有し、休み時間などに交流する機会を保障することによって、対象児童と友達が気軽に交流することができた。
 - ・ 対象児童が持っている「友達と一緒に頑張りたい」という思いやその都度頑張っている課題などを、支援者が交流学級の友達に伝えることで、対象児童と一緒に活動するにはどうしたらいいかを考え方ができるようになった。
 - 教職員について
 - ・ 交流学級担任や特別支援学級担任は、対象児童と直接関わることで児童の特性を理解し、適切な支援や声掛けを行うことができた。

イ 校内および関係機関との連携体制の構築

- ① 教職員、地域への特別支援教育に関する理解啓発について
 - 校内外に向けての研修会などを今後継続して行い、肢体不自由児と交流学級児童との具体的な交流の在り方や支援の仕方について多くの人と共有する。
 - 今年度の取組の効果を持続させるための十分な体制を維持する。
- ② 学校と外部の専門機関との日常的な連携体制の構築
 - 本取組における「ワーキングチーム」のような体制づくりを今後他校でのインクルーシブ教育システムの実践をする際にも構築していくことが重要である。
 - ワーキングチームをはじめ、多くの関係機関の助言や協力を得ることができた。対象児童の特性を考えると困り感の原因は多岐にわたり、様々な専門機関の助言を受けることはとても有効であった。今後、校内の特別支援コーディネーターとともに、県や市町村などの各機関との連携体制づくりが重要である。